

シリーズ「乳がん③」

乳がんの診断(検査について)①

独立行政法人国立病院機構和歌山病院

研究検査科 河野 明

今回は、乳癌の診断(主に検査)について大まかな流れをご説明いたします。

まず、医師による問診と視診・触診が行われます。そのあとに超音波(エコー)検査やマンモグラフィ検査が行われるのですが、当院では診察室で医師が直接エコー検査を実施しています。エコー検査はプローブ

マンモグラフィ検査については、シリーズの後の回で説明されると思いますが、この検査による画像診断と合わせて総合的に判断され診断がなされます。乳腺炎や良性の線維腺腫等と診断された場合は経過観察となりますが、癌が疑われる場合はさらに次の検査へと進みます。

癌かどうかを確定するには、その病変の部分の細胞が癌細胞であるという特徴を特定する必要があります。細胞を採取して検査する方法として大きく2種類、細胞診(さきくしん)と組織診(そいぼうしん)と組織診(そいぼうしん)があります。

細胞診は、採血で用いるのと同様の針を乳房に刺して、エコー検査で画像を見て病変の部分を確認しながら、その部分の細胞を陰圧をかけて注射器で吸引するというものです。注射針と言えども針を刺すので痛みは伴います。吸引された乳汁や血、病変細胞を含む液はガラスの板(スライドグラス)に塗られ、アルコール等で固定されて病理検査へと回ります。また、乳頭から分泌物が出ている場合は、その分泌物をスライドグラスに塗り付け検査標本とすることもできます。これらのスライ

ドグラスはパニコロウ染色という方法で細胞が染められ、サイトスクリーナーという専門の資格を持った検査技師と病理専門の医師によって顕微鏡で観察、診断されます。この方法で癌と診断がつく場合もあります。が、上手く細胞が採取されていなかったり、良性・悪性の判断がつけ兼ねるといった場合には、さらに次の組織診を実施する必要があります。(最近では直接組織診を実施することの方が多くなっています)

組織診は、病変部の組織を直接採取する検査です。針生検(はりせいけん)と

針と呼んでいますが、実際には注射針よりは太く、採取器具を見られたら驚かれるのではないのでしょうか。さすがにこちらは皮膚に局所麻酔を打ってから実施されることになりま

す。さらに、もっと太い針を使って組織を自動的に吸引する専用の機械を用いて行うマンモトームという生検法もあります。当院では針生検を実施しています。

続きは次回に、今ドラマにもなっています病理組織診断について詳しくお話ししたいと思います。